



漢方医学教育 SYMPOSIUM 2022

2022年2月11日(金・祝) 15:00～19:00
【Web配信】

一般財団法人 日本漢方医学教育振興財団
評議員・理事・監事

【評議員】

評 議 員	佐藤 達夫	東京医科歯科大学 名誉教授 東京有明医療大学 名誉学長
評 議 員	久保 千春	中村学園大学 学長 前 九州大学 総長
評 議 員	中谷 晴昭	千葉大学 理事・副学長
評 議 員	今井 裕	東海大学医学部付属八王子病院 画像診断科 特任教授
評 議 員	河野 陽一	千葉ろうさい病院 名誉院長 千葉大学 名誉教授
評 議 員	久光 正	昭和大学 学長
評 議 員	町田 吉夫	日本漢方生薬製剤協会 常務理事

【理 事】

理 事 長	伴 信太郎	中津川市地域総合医療センター センター長 愛知医科大学 特命教育教授 名古屋大学 名誉教授
専務理事	松村 明	茨城県立医療大学 学長 筑波大学 名誉教授
常務理事	三瀧 忠道	福島県立医科大学会津医療センター 漢方医学講座 教授
理 事	高久 史磨	地域医療振興協会 会長 日本医学会連合 名誉会長
理 事	北村 聖	地域医療振興協会 地域医療研究所 シニアアドバイザー 東京大学 名誉教授
理 事	田妻 進	JA尾道総合病院 病院長 広島大学客員教授・名誉教授
理 事	小西 郁生	国立病院機構京都医療センター 名誉院長 京都大学 名誉教授
理 事	林 純	原土井病院 九州総合診療センター長 九州大学 名誉教授
理 事	渡辺 毅	東京北医療センター 総合内科 顧問 福島労災病院 名誉院長 福島県立医科大学 名誉教授
理 事	岩瀬 鎮男	東京大学医学部附属病院 病院長補佐・事務部長
理 事	木村 容子	東京女子医科大学附属東洋医学研究所 所長・教授
理 事	柴原 直利	富山大学和漢医薬学総合研究所 和漢医薬教育研修センター 教授
理 事	瀬尾 宏美	高知大学医学部附属病院 総合診療部 教授
理 事	蓮沼 直子	広島大学医学部附属医学教育センター センター長 教授
理 事	遠藤 浩司	株式会社ツムラ 執行役員
理 事	松田 隆志	日本漢方医学教育振興財団 事務局アドバイザー

【監 事】

監 事	永沢 徹	永沢総合法律事務所 代表弁護士
監 事	小澁 高清	小澁公認会計士・税理士事務所 代表

研究助成選考委員会・委員

委員長 (理事)	瀬尾 宏美	高知大学医学部附属病院 総合診療部 教授
委員 (理事)	柴原 直利	富山大学和漢医薬学総合研究所 和漢医薬教育研修センター 教授
委員	長谷川仁志	秋田大学大学院 医学系研究科医学教育学講座 教授
委員	山脇 正永	東京医科歯科大学 医学部 副学部長 大学院医歯学総合研究科 教授 臨床医学教育開発学分野
委員	平出 敦	京都橘大学 健康科学部 救急救命学科 教授
委員	小林 直人	愛媛大学大学院医学系研究科 医学教育学講座 教授 医学部 総合医学教育センター長 副学長(評価)
委員	喜多 敏明	辻中病院柏の葉 漢方未病治療センター・センター長
委員	伊野 美幸	聖マリアンナ医科大学 医学教育文化部門医学教育研究分野 教授 総合教育センター センター長
委員	小松 弘幸	宮崎大学医学部 医療人育成支援センター 臨床医学教育部門 教授
委員	間宮 敬子	宮崎大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター センター長 信州大学医学部附属病院 信州がんセンター緩和部門 教授

教材委員会・委員

委員長 (常務理事)	三瀨 忠道	福島県立医科大学会津医療センター 漢方医学講座 教授
委員 (理事)	蓮沼 直子	広島大学医学部附属医学教育センター センター長 教授
委員	新井 信	東海大学医学部専門診療学系漢方医学 教授
委員	高山 真	東北大学大学院医学系研究科 漢方・統合医療学共同研究講座 特命教授
委員	網谷 真理恵	鹿児島大学医歯学総合研究科 離島へき地医療人育成センター 講師

(順不同・敬称略)

<2022年2月1日現在>

漢方医学教育 SYMPOSIUM 2022 プログラム

シンポジウム

15:00 - 19:00

■ 開会のあいさつ

日本漢方医学教育振興財団 理事長 伴 信太郎

■ 表彰式<研究助成・業績表彰> 15:05 - 15:40

日本漢方医学教育振興財団 理事長 伴 信太郎

採択・受賞者表彰

■ 受賞講演 15:40 - 16:20 座長:日本漢方医学教育振興財団 専務理事 松村 明

奨励賞

女性ヘルスケアを対象とした漢方医学教育

近畿大学東洋医学研究所 所長・教授 武田 卓

功労賞

漢方医学一卒前教育確立への願い

聖マリアンナ医科大学 総合診療内科 特任教授 医学情報センター長 松田 隆秀

■ 漢方医学教育研究助成<2018年度最終報告> 16:30 - 17:50

座長:日本漢方医学教育振興財団 常務理事 三渚 忠道

<一般研究>

iOSアプリを利用した重要処方および漢方診断推論学習法の開発

三重大学附属病院 漢方外来(麻酔科) 助教 高村 光幸

漢方 Problem Based Learning (PBL) を基にした学術発表により得られる
医学生の学び

東北大学病院 総合地域医療教育支援部・漢方内科 特命教授 高山 真

体験型漢方実習の教育効果:質問紙法による検証

群馬大学大学院医学系研究科 総合医療学 講師 佐藤 浩子

医学、歯学、看護学で連携した漢方教育カリキュラムの開発

鹿児島大学 医歯学総合研究科 国際島嶼医療学 講師 網谷 真理恵

アクティブラーニングを利用した授業での効果的な指導法の確立
一反転授業を利用した学生のタイプ別の漢方の理解度および
興味喚起の阻害因子の検討

千葉大学大学院医学研究院 和漢診療学 准教授 並木 隆雄

<グループ研究>

薬理学ロールプレイを活用した漢方医学教育の試み

宮崎大学医学部 看護学科 臨床薬理学 教授 柳田 俊彦

漢方医学教育向上のためのより効果的な腹診シミュレータ活用法

明治薬科大学 臨床漢方研究室 教授 矢久保 修嗣

■ 総合討論 18:00 - 18:55

医学部における漢方教育の在り方
～医学生にわかりやすい漢方教育を目指して～

座長：高知大学医学部附属病院 総合診療部 教授 瀬尾 宏美
広島大学医学部附属医学教育センター センター長 教授 蓮沼 直子

指定講演

漢方教育の課題と展望

広島大学医学部附属医学教育センター センター長 教授 蓮沼 直子

■ 閉会のあいさつ

日本漢方医学教育振興財団 評議員 久保 千春

2020年度 表彰者一覧

奨励賞

該当者なし

功労賞

該当者なし

一般研究

「バーチャルリアリティ技術を応用した腹診学習コンテンツの作成と実践」

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授 野上 達也

「クラウド型教育支援サービスによる均一化された漢方教育の拡充」

旭川医科大学産婦人科 教授 加藤 育民

「漢方医学に対する多職種連携教育システムの構築」

大阪医科薬科大学医学教育センター 講師（副センター長） 駒澤 伸泰

「医学部学生用動画教材の作製とそれを用いた多学部合同実習の設計」

岩手医科大学医学部医学教育学講座 医学教育学分野 特任講師 相澤 純

グループ研究

「Web投票を活用した舌画像データベースによる標準化舌診自己学習」

山口大学医学部附属病院 漢方診療部 准教授 瀬川 誠

「医学生を対象とした漢方医学教育入門編の開発と検証」

神奈川県立産業技術総合研究所 特任研究員 伊藤 亜希

2021年度 表彰者一覧

奨励賞

「女性ヘルスケアを対象とした漢方医学教育」

近畿大学東洋医学研究所 所長・教授 武田 卓

功労賞

「漢方医学の基本的な考え方を日本の全医学部で教える活動」

聖マリアンナ医科大学 総合診療内科 特任教授 医学情報センター長 松田 隆秀

一般研究

「がん支持医療におけるエビデンスに基づいた漢方活用の教育コンテンツ作成と実践」

岡山大学病院 血液・腫瘍内科 助教 西森 久和

「漢方講義テキストを用いたチュートリアル漢方教育の設計と知識定着における検証」

東京大学大学院医学系研究科老年病学 准教授 小川 純人

「ゲーミフィケーションを利用した漢方医学教育」

奈良県立医科大学 教育開発センター 准教授 若月 幸平

グループ研究

「漢方医学教育における舌診の習得のためのプログラム構築」

広島大学病院 総合診療科 助教 河原 章浩

「アクティブラーニングによる症例検討モデル授業ガイド開発研究」

富山大学附属病院和漢診療科 特命教授 貝沼 茂三郎

女性ヘルスケアを対象とした漢方医学教育

近畿大学東洋医学研究所 所長・教授 武田 卓

女性は月経・妊娠・閉経といった、劇的な内分泌的変化をとげ、男性より心身の不調が多い。更年期障害や月経関連疾患が代表疾患であるが、治療薬であるホルモン製剤の特殊性から一般家庭医での対応は不十分であり、さらに一般女性のこれら製剤の受け入れも不良である。そもそも女性特有の疾患に対しては、古来より漢方治療が汎用されており、漢方薬は臨床各科で容易に処方可能であることから、現状打開の有効な手段として期待できる。私は、産婦人科と漢方の専門医・指導医の両面から、一般的な漢方医学の卒前・卒後教育に加えて、女性ヘルスケア領域への漢方治療の活用を意識した教育活動を実践してきた。卒前教育では、医学教育の各段階に応じた講義・実習を実施し、特に女性ヘルスケア領域で汎用される漢方治療に関する解説を婦人科内分泌の講義に併せて実施した。現代医療のなかの漢方治療を西洋医学的側面からとらえ、西洋医学を中心に勉強する医学生に違和感なく学習できるシステムを構築した。卒後教育においては、日本産科婦人科学会診療ガイドライン創刊時に、作成幹事・作成委員として、更年期障害における漢方治療に関する項目の創案・作成に尽力した。この結果、具体的な推奨処方が学会発行のガイドラインに掲載され、治療法の一つとして確立・認知されたものとなり、漢方治療の地位確立に貢献した。さらに、産婦人科領域基幹学会である日本産科婦人科学会・女性医学学会において、女性漢方医学に関する教育講演を担当するとともに、専門医試験受験時の必修テキストにおける「漢方療法」を執筆担当するなど、女性ヘルスケアを標的とした漢方医学卒後教育普及に務めてきた。現在、2019年度漢方医学教育財団助成により、初期臨床研修医を対象とした女性ヘルスケア領域の必須漢方処方選定と教育プログラムを実証中であり、これにより、すべての医師が女性ヘルスケア領域疾患に初期対応可能となることを目指したい。

学 歴

- 1987年 大阪大学医学部卒業
1995年 大阪大学医学部大学院博士課程修了

職 歴

- 1997年 大阪大学医学部産婦人科助手
1998年 大阪府立母子保健総合医療センター産科診療主任・医長
2001年 大阪大学医学部産婦人科助手
2004年 大阪府立成人病センター婦人科副部長
2007年 大阪大学医学部産婦人科助教（学内講師）
2008年 東北大学医学部先進漢方治療医学講座准教授
2012年 近畿大学東洋医学研究所所長教授、東北大学産婦人科客員教授

専門医等

日本思春期学会常務理事、日本女性心身医学会副理事長、日本産科婦人科学会代議員、日本内分泌学会評議員、日本抗加齢医学会評議員、日本産科婦人科学会女性ヘルスケア委員会委員、日本産科婦人科学会専門医・指導医、日本女性医学会女性ヘルスケア専門医・指導医、日本内分泌学会（産婦人科）専門医・指導医、日本婦人科腫瘍学会専門医、日本東洋医学会漢方専門医・指導医、等

漢方医学—卒前教育確立への願い

聖マリアンナ医科大学 総合診療内科 特任教授 医学情報センター長 松田 隆秀

私は大学病院でリウマチ専門医、総合診療内科医として診療に従事してまいりました。診療中、「漢方の知識があれば、どれだけ素晴らしいだろうか」と思うことが度々ありました。それ故、医学部学生には将来いかなる専門医になっても、漢方を活用できる臨床医になってほしいと思います。

西洋医学の著しい発展に伴う細分化が、医学教育や日常診療にも反映されています。そのような背景より、漢方の能力を併せ持つ臨床医の育成、すなわち「全国医学部にて実施可能な漢方医学教育を導入したい」——これが私の願いであります。それには漢方専門医のお力添えが必要であり、非漢方専門家（私）から漢方医学の門を叩く決心をしました。そして、全国医学部で導入するには、漢方医学を担う教員による協議会の設立が必要であると考えました。全国医学部に漢方教育の現状を訊ねたところ、多くの大学においては教育資源が充分ではないとのことでした。一方、漢方（東洋医学）講座がある大学では圧倒的に教育が充実し、大学間での教育格差が極端でありました。そして、学生が漢方医学に知的好奇心を抱くような「漢方医学教育」の確立は、漢方医学教育の資源が充分でない大学共通の願いでもありました。そこで全国医学部の漢方教育担当者にお声掛けさせていただき、日本漢方医学教育協議会を2015年に立ち上げました。協議会では、全医学部の漢方教育責任者（漢方専門家および非専門家が参加）によるコンセンサスミーティングを重ねていただきました。その成果物には、①「基盤カリキュラム2016」、②「モデルスライド」と「講義ガイド」があります。更に、これらの成果物をもとに教科書『基本がわかる 漢方医学』（日本漢方医学教育協議会 編、羊土社）が発刊されました。これらは協議会に参加された全国医学部の漢方医学教育を担う先生方全員の成果であります。以上、漢方医学教育への私の願いと本協議会の活動を紹介させていただきました。功労賞にご推薦いただきました本財団の皆様に感謝申し上げます。

職 歴

1980年 聖マリアンナ医科大学卒業
1986年 同 大学院博士課程修了
1995年 同 難病治療研究センター 診療部門 助教授
1999年 同 リウマチ・膠原病・アレルギー内科 助教授
2006年 同 総合診療内科 教授

専門医など

日本リウマチ学会 指導医
日本病院総合診療学会 指導医
日本臨床薬理学会 指導医
日本医学教育学会 認定医学教育専門家

学会活動など

日本病院総合診療医学会 理事
日本医史学会 理事
日本東洋医学会 代議員
東亜医学協会 理事
日本漢方医学教育協議会 事務局担当 (2021年3月まで)

iOSアプリを利用した重要処方および漢方診断推論学習法の開発

三重大学附属病院 漢方外来（麻酔科） 助教 高村 光幸

2000年3月 三重大学医学部卒業
2000年5月 三重大学附属病院小児科入局
2005年7月 三重大学附属病院病理部所属
2007年4月 三重大学大学院医学系研究科公衆衛生産業医学分野産業医学プロジェクト研究室助教
2009年4月 順天堂大学大学院医学系研究科（衛生学）協力研究員（2015年3月まで兼務）
2010年4月 三重大学附属病院漢方外来（麻酔科）担当医師（産業医学助教と兼務）
2012年7月 三重大学附属病院漢方外来助教

研究計画に沿って文献検索を行い、西洋医学の臨床推論教育に用いられる二重プロセス理論が漢方教育においても応用できる可能性が確認された。日本東洋医学会の専門医向け「問題と解説」増補改訂版（以下、問題集）にて頻出される処方から、当帰芍薬散など8処方を重要処方として選定した。各処方に関する過去の名医の症例提示を検討し、疾患スクリプトに相当する「証スクリプト」として収集、システム1（直観的思考）強化教材として利用した。また、各処方における陰陽虚实、気血水、五臓、六病位、腹証、脉証、舌証、原典正証、臨床応用、口訣を収集し、システム2（分析的思考）強化の教材とした。これらを元に、医師及び医学生（計21名）に対し講義を行った。問題集より選出の臨床問題を講義前後に各3問ずつ解答させた。全体正解率は講義前9.5%、講義後81.0%だった。特に3年未満の学習経験のみを持つ群ではそれぞれ6.3%、75.0%であり、正解率は統計学的有意に上昇した。講義内容はiOSにおけるKeynoteファイル、動画として自己学習可能なものとした。また、問題集の臨床問題を網羅したiOS「漢方臨床演習アプリ」を作成した。コロナ禍となり、これらのアプリ搭載端末による学習効果の検証は困難であったが、以下の知見を得られた。①日本漢方における伝統的な教育方法は、人間の認知に関する二重システム理論におけるシステム1を重要視して、これを的確に利用できるような意図が背景にある。②二重システム理論を学習者に意識させ、先人が残した口訣や証スクリプトを十分に活用し、一方で基礎理論の理解強化を図る学習方法を用いることで、頻用重要処方の適応症例が理解しやすくなることが証明された。③iOSのアプリを活用することで、複数冊の書物分に相当する知識を短時間で利用でき、繰り返し演習問題を解くことで学習効率が上がる可能性があることが示唆された。

漢方Problem Based Learning (PBL) を基にした 学術発表により得られる医学生の学び

東北大学病院 総合地域医療教育支援部・漢方内科 特命教授 高山 真

平成9年 宮崎医科大学医学部医科学科 卒業
平成22年 東北大学大学院医学系研究科 医学博士課程修了
ミュンヘン大学麻酔科ペインクリニック 留学
平成23年 東北大学大学院医学系研究科先進漢方治療医学講座 講師
平成27年 東北大学病院 総合地域医療教育支援部 准教授、副部長
平成31年 東北大学大学院医学系研究科 漢方・統合医療学共同研究講座 特命教授

背景: Problem Based Learning (PBL) は学習者が自ら考え問題を解決する思考を促進する教育方法である。漢方の理解を深める漢方 PBLを行いその教育効果を明らかにすることは漢方医学における一つの方法を提示することになり、医学生時代の学会発表や論文投稿の経験は漢方に関する研究探求心の涵養に寄与すると考える。

目的: 漢方 PBLの教育効果を明らかにする。また、PBLの内容を発展させて学会発表、論文投稿につなげ、その経験がもたらす医学生の学びを明らかにする。

方法: 採択年度を含む研究期間中、医学部2年生を対象に漢方医学の特徴や漢方薬の理解に関する漢方 PBLを実施し、教育効果を明らかにするため4年生の臨床薬理試験成績を漢方 PBL受講者、非受講者間で比較した。また、国内学術総会等での発表や論文作成を目標に支援を継続し、一連の経験から得られた学びを医学生にインタビューしまとめた。

結果: 漢方 PBLを11グループ、計44名を対象に実施した。PBLの成果としては担当した11グループ中、7グループが学内表彰を受けた。また、医学部奨励賞2演題受賞、国内総会1演題発表、国際学会1演題発表、和文誌1論文掲載、英文誌1論文掲載などの学術的成果が得られた。医学生インタビューでは、「漢方の国際的取り組み」、「コミュニケーション能力」、「研究の枠組み」、「データと統計の重要性」、「わかりやすいポスター作製」、「改善点への気づきと解決に至る持続的努力」、「協力者への感謝」、「まとめることの意義」などがキーワードとして挙げられた。漢方 PBLの受講と4年生臨床薬理のテスト結果の関連性では、受講者が非受講者に比較し有意に得点が高かった ($P < 0.05$)。

結論: 漢方 PBLにより漢方に関する学習とその定着度が向上すること、学生時代の発表や論文投稿の経験は漢方に関する研究探求心の涵養に寄与する可能性が示唆された。

体験型漢方実習の教育効果：質問紙法による検証

群馬大学大学院医学系研究科 総合医療学 講師 佐藤 浩子

学歴・職歴：

平成 8 年 3 月 群馬大学医学部卒業
平成 12 年 4 月 群馬大学大学院医学系研究科（内科学専攻）博士課程入学
平成 16 年 3 月 医学博士課程修了・医学博士取得
平成 16 年 10 月 群馬大学医学部附属病院・統合和漢診療部・助教
平成 22 年 4 月 群馬大学医学部附属病院・救命・総合医療センター・講師
平成 28 年 4 月 群馬大学大学院医学系研究科・総合医療学・講師
現在に至る。

座学と臨床実習を結ぶ位置付けとして、アクティブラーニングが有用視されている。本学では、医学科2年の漢方医学講義と4年次以降の臨床実習の間に、チーム基盤型学習（TBL）を用いて漢方医学を教育している。また、臨床実習の中ではロールプレイを用いて漢方の医療面接を学ぶ機会を設けている。これらの体験型教育の教育効果を検証するため、質問紙法による研究を行なった。

対象は①2019年に漢方医学 TBLを履修した医学科3年生130名、②2019年1月から2019年11月に総合診療部での臨床実習に参加した医学科4～5年生111名であった。25項目からなる質問紙を実習の前後で回答させた。質問紙は「漢方医学への関心」、「漢方実習への期待」、「漢方を学習する上での不安」を下位尺度として作成し、7件法で回答を得た。この結果をそれぞれTBL、臨床実習の前後でWilcoxonの符号順位検定で分析・比較した。質問紙の妥当性を因子分析で分析した。漢方の有益性を問う記述式質問についてはテキストマイニングで分析した。

TBLの実習前後の比較では、漢方への興味や漢方医学的病態の理解は有意に改善したが、将来臨床に生かすイメージは変化しなかった。一方臨床実習前後の比較では、漢方を臨床に生かすイメージも有意に改善した。漢方学習への不安はいずれの実習でも有意に改善していた。因子分析では、「漢方学習継続への意欲」、「漢方学習の意義」、「漢方学習の不安」の3つの因子が抽出された。テキストマイニングでの分析では、臨床実習で、実際に漢方を臨床に生かすイメージが想起されることが示された。

漢方医学のアクティブラーニングにより漢方への関心を高める効果が期待できる。臨床実習生に対するアクティブラーニングは臨床への応用、将来への継続性を想起することに役立つが、TBLではより工夫が必要と考えられた。

医学、歯学、看護学で連携した漢方教育カリキュラムの開発

鹿児島大学 医歯学総合研究科 国際島嶼医療学 講師 網谷 真理恵

平成18年 鹿児島大学医学部卒業
平成20年 鹿児島大学心身医療科
平成23年 がん研有明病院 漢方サポート科
平成24年 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科医歯学教育開発センター 助教
平成26年 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター 特任助教
平成29年 鹿児島大学医歯学総合研究科地域医療学分野 講師
現在に至る

近年、医学教育や薬学教育のみならず、歯学教育、看護教育においてもモデル・コア・カリキュラムに和漢薬（漢方薬）について記載され、多職種連携による漢方治療を実現するために、薬学、看護学、医学、歯学が連携した教育体制が求められている。

本研究の目的は、日本の大学における漢方授業の現状を調査し、各学部が抱える問題点と多職種連携システムの必要性を明らかにし、新たなカリキュラムについて開発することである。

カリキュラム構築前のニーズ調査として日本の大学の医学部、薬学部、歯学部、看護学部の全学部において、漢方カリキュラムのアンケート調査を実施した。複数回答項目については、多変量解析とコレスポネデンス解析を行った。その結果、医学部、歯学部、看護学部では、講師の不足とカリキュラムの時間数が問題であることがわかった。医学部、看護学部、歯学部では、カリキュラムの時間数の不足が問題点として挙げられている。医学部、薬学部では、体験学習（アクティブラーニング）、問題解決型学習・チュートリアル教授法をさらに取り入れたいと考えていることがわかった。漢方カリキュラムに学際的な連携システムを取り入れることは、4つの学部のいずれでも多くの回答者が求めている。

さらに、我々は、漢方学的視点を通して多職種連携を行うプログラムを開発し、医師、研修医、学生、看護師、栄養士、薬剤師、ソーシャルワーカーが参加する事例検討会を開催した。

個々の学部の問題点やニーズの傾向を把握することができ、漢方カリキュラムの展開の方向性が示唆された。今後は医学・薬学・歯学・看護の教育連携体制を構築し、指導者不足を補いつつ合同で実践できるカリキュラムを実践していくことで、漢方教育を通じた多職種連携体制の展開も望まれる。

アクティブラーニングを利用した授業での効果的な指導法の確立 —反転授業を利用した学生のタイプ別の漢方の理解度および 興味喚起の阻害因子の検討

千葉大学大学院医学研究院 和漢診療学 准教授 並木 隆雄

1985年 千葉大学医学部卒業
1985年 千葉大学医学部附属病院第三内科
1993年 医学博士取得
1998年 帝京大学附属市原病院心臓血管センター助手
1999年 帝京大学附属市原病院心臓血管センター講師
2002年 千葉県立東金病院内科部長
2005年 千葉大学大学院医学研究院先端和漢診療学客員助教授
2010年 千葉大学大学院医学研究院和漢診療学准教授(現在に至る)
2011年 千葉大学医学部附属病院和漢診療科 科長
2012年 千葉大学医学部附属病院和漢診療科診療教授

【初めに】

アクティブラーニングを用いた教育は学生の主体性を伸ばす学習法で、問題解決能力を必要とする医学部生学習としては最適な学習法の一つと考えられる。しかし、その前に、西洋医学の知識と重なりが少ない漢方教育ではアクティブラーニングができるレベルまでに知識を高める必要があり、漢方e-learning (e) を利用した反転授業は有用な手段と考えられる。

【目的・意義】

漢方に対する興味度または他の因子で学生のタイプを分け、どのような項目が理解力に影響するかを比較検討する。また、漢方に対する興味がわからない理由を明らかにすることで学習効果の向上が図れる可能性もある。

【方法】

2019年(120人)と2021年(109人)に4年を対象に同一内容の反転授業90分を実施した。授業は、2019年はクリッカーを使用した集合対面授業とし、2021年はアクティブラーニング(Fishbowl)を行った。各年ともe受講前、e受講後(講義前)、講義後の3回アンケートを実施し、「正答率」を指標として理解度を解析した。

【結果】

e受講率は2019年90.8%、2021年100.0%であった。各年とも理解度と興味度の両方に関連しているのは、「漢方の特徴/適応/薬理作用を概説できる」うち「漢方の特徴」だけであった。また、理解度のみでは「処方できる漢方薬の数」であり、「漢方の漢字の難易度」は明確な阻害因子でなかった。興味度は、e受講後に低下した学生は授業後も低く、漢方の興味は、最初の学習段階の興味度で決定される傾向にあった。2019年に実施した「生薬の味見」と「クリッカーを使用した授業」は漢方の興味を促進する要素であった。2019年と比較し、2021年では「授業は有用でない」と評価した学生はいなくなった。そのため、Fishbowl授業はクリッカーを用いた集合対面授業より学生にとって有用と実感できる学習手法と示唆された。

薬理学ロールプレイを活用した漢方医学教育の試み

宮崎大学医学部 看護学科 臨床薬理学 教授 柳田 俊彦

略歴

(学歴)

1984年 4月 宮崎医科大学医学部医学科 入学
1990年 3月 宮崎医科大学医学部医学科 卒業
1993年 4月 宮崎医科大学大学院医学研究科博士課程 入学
1997年 3月 宮崎医科大学大学院医学研究科博士課程 修了

(職歴)

1990年 6月 労働福祉事業団 総合せき損センター医員(泌尿器科)
1990年12月 宮崎医科大学附属病院 研修医(泌尿器科)
1992年 5月 宮崎医科大学附属病院 医員(泌尿器科)
1997年 4月 宮崎医科大学 薬理学講座 助手
2002年 4月 宮崎医科大学 薬理学講座 兼任講師
2003年10月 宮崎大学 医学部 機能制御学講座 薬理学分野 兼任講師
2008年 6月 宮崎大学 医学部 機能制御学講座 薬理学分野 准教授
2014年 1月 宮崎大学 医学部 看護学科 臨床薬理学 教授(現在に至る)

本研究では、実践的薬物治療のアクティブラーニング『薬理学ロールプレイ』を漢方医学教育に活用し、その有効性を検討するために、教育的に様々なバックグラウンドを有する国公私立の医学部8大学(全国医学部10分の1モデル:宮崎大学、九州大学、産業医科大学、久留米大学、長崎大学、金沢大学、愛知医科大学、獨協医科大学)において、共通プログラムとして漢方薬の症例を用いた『薬理学ロールプレイ』を実施し、その有効性を検討した。

コロナ禍により実施不可能になった大学もあったが、薬理学ロールプレイをオンライン実施することで、継続的な実施が可能となった。参加大学の追加(5大学:東北医科薬科大学、愛媛大学、三重大学、鹿児島大学、藤田医科大学)により、13大学(全国の医学部82大学の16%)での実施が可能となった。その一方で、対面実施では4症例なのに対し、オンライン実施では2症例になってしまうため、大学によっては、漢方の症例を組み込むことができなかった。各大学の学生数を平均100名とすると本プログラムを受講した学生数の概算は、2018-2021年度通算で3000名に及ぶ(2018年度:約700名、2019年度:約900名、2020年度:約700名、2021年度:約700名)。医学部薬理学教育における漢方教育の普及・均てん化という観点からみて本研究は大きな意味を持つ。アンケート結果において最もよい結果が得られたのは、事前教育を十分に行った4年生を対象とした長崎大学で、アンケート3項目(1. 漢方薬の理解や知識の向上に役立ちましたか 2. 漢方薬を身近な薬として捉えることができるようになりましたか 3. 漢方薬を活用してみたいと思いましたか)の全てで5段階評価の4以上が90%を超えていた。解析結果から、症例の工夫と事前学習の組み合わせの重要性が明らかとなった。シンポジウムでは、これらの実施例を紹介したい。

漢方医学教育向上のためのより効果的な腹診シミュレータ活用法

明治薬科大学 臨床漢方研究室 教授 矢久保 修嗣

1984年 3月 日本大学医学部卒業
1984年 4月 日本大学医学部第2内科入局
日本大学大学院医学研究科入学
1988年 4月 日本大学大学院医学研究科修了（医学博士）
1990年 4月 国立甲府病院内科医員
1992年11月 春日部市立病院内科医長
2000年 4月 日本大学医学部東洋医学講座入局
日本大学医学部附属板橋病院東洋医学科外来医長
2001年 5月 日本大学薬学研究所研究員（兼任）（～2002年3月）
2005年 7月 日本大学医学部附属板橋病院東洋医学科科長
2007年 8月 日本大学医学部内科学系統合和漢医薬学分野准教授
2015年 1月 日本大学医学部内科学系総合内科・総合診療医学分野准教授
2017年 4月 明治薬科大学臨床漢方研究室教授
日本大学医学部内科学系総合内科学分野客員教授

腹診シミュレータ活用による漢方医学教育に関する活動を報告する。

腹診シミュレータ活用による教育方法の検討：『腹診シミュレータ教育研究会』を2019年10月20日に本学紀尾井町キャンパス剛堂会館で開催した。腹診シミュレータ活用による教育経験などが8大学から報告され、腹診シミュレータ製作に関する発表や腹診シミュレータのアンケート調査と意見交換が18大学により行われた。腹診シミュレータ教育の現状を知り、その活用に関する理解を深めることができた。

新たな腹診シミュレータの製作：当帰芍薬散モデルと桂枝茯苓丸モデルに加えて、新たに加味逍遙散モデルを製作した。これで女性の重要3処方の腹部モデルを用意できた。小腹不仁モデルに加えて、新たに小腹拘急モデルも製作した。これにより高齢者の腹部所見モデルを用意できた。シミュレータ使用を希望する教育機関への、これらのモデルの貸し出しが可能となっている。

腹診シミュレータ活用による教育に関する啓発活動：『腹診シミュレータ教育研究会』で行われた8演題の発表内容に、「コロナ禍における漢方診療実習」と、「腹診シミュレータ取り扱い説明」、腹診シミュレータに関する14論文を加え、『腹診シミュレータ教育マニュアル』を製作した。これは国内の医学部・医科大学の漢方医学教育担当者に送付した。腹診シミュレータを活用する漢方医学教育の際に、漢方医学教育担当者の参考になることが期待される。このマニュアルの内容を新たに収録し、インターネット上に『腹診シミュレータ教育研究会報告』を用意した。これにより日本全国から『腹診シミュレータ教育マニュアル』の内容を、オンデマンドで視聴することが可能となり、腹診シミュレータ活用の理解が深まることが期待される。

謝辞：本研究に対する日本漢方医学教育振興財団の支援に深謝する。

医学部における漢方教育の在り方 ～医学生にわかりやすい漢方教育を目指して～

座長：高知大学医学部附属病院 総合診療部 教授 瀬尾 宏美
広島大学医学部附属医学教育センター センター長 教授 蓮沼 直子

医学部医学科における漢方教育の重要性が注目される契機となったのは、2001年度制定の医学教育モデル・コア・カリキュラムに「和漢薬を概説できる」と記載されたことであり、2017年までの改訂ごとに具体的な内容へと改訂されてきた。また、我が国でも国際基準に基づく医学教育分野別評価が始まり、日本版基準にも「補完医療との接点をもつこと」が明記され、学部における漢方医学教育の必要性が一層高まっている。さらに2019年改訂の世界疾病分類ICD-11には古代中国由来の伝統医学（漢方）の章が収載され、漢方に対する国内外からの機運が高まっている。

そのような中、2020年には全国82医学部の漢方医学教育担当者が参加する「日本漢方医学教育協議会」で作成された講義用モデルスライドおよび講義ガイドに基づいて、初学者向けのテキストである「基本がわかる漢方医学講義」が上梓された。そして、コロナ禍においても、漢方医学教育の現場ではオンライン授業やe-learningなど様々な工夫が行われている。

今回は、医学部における漢方教育の在り方について、より医学生にわかりやすい漢方教育を目指して、ご参加の先生方のご意見を頂きながら議論を進めていきたい。

漢方教育の課題と展望

広島大学医学部附属医学教育センター センター長 教授 蓮沼 直子

医学科における卒前漢方教育は医学教育の中では2001年に医学教育モデル・コア・カリキュラムに「和漢薬を概説できる」という項目が明文化され、それにより卒前教育の中での漢方に関する講義の導入が進んだ。最新の2016年の改訂で「漢方医学の特徴や主な和漢薬（漢方薬）の適応、薬理作用を概説できる」と記載されたが、その歴史や基本理論、診察方法や漢方薬の構成と効果、生薬など教育内容や対象疾患が多岐にわたるため、卒前に何をどこまで学ぶのかわかりにくい。また大学により、講義時間数も異なり、他の臨床科目に比べ時間が限られていることが多く、卒前漢方教育において共通の学修のねらいや到達目標を作成しづらい。

教員の観点からは具体的な学習内容、教え方、評価方法など手探りで行っている側面もあり、講義だけでなく、症例検討や煎じなどの実習、臨床実習などについても Good Practiceの提示など具体的な情報共有が望まれる。

漢方診療は多くの診療科の医師が行っており、生涯学習の側面も大きい。卒前から卒後のシームレスな漢方教育をふまえ、卒前漢方教育の展望について考察し、総合討論につなげたいと考えている。

略 歴

- 1994年 3月 秋田大学医学部医学科卒業
1994年 5月 秋田大学医学部皮膚科
1997年 1月 National Institutes of Health, NCI,
～1999年9月
2003年10月 東北大学医学部皮膚科 大学院研究生
2004年 8月 秋田大学医学部感覚器学講座皮膚科学・形成外科学分野
2009年 4月 秋田大学医学部総合地域医療推進学講座
2019年 3月 広島大学大学院医系科学研究科 医学教育学
広島大学医学部附属医学教育センター 教授
2019年 4月 医学部長補佐・教務委員長
2019年10月 医学教育センター長
- 2013年～ 愛媛大学医学部非常勤講師
2016年～ 熊本大学医学部非常勤講師
2016年～ 福島県立医科大学非常勤講師
2017年～ 金沢大学非常勤講師
2018年～ 高知大学非常勤講師
2019年～ 聖マリアンナ医科大学非常勤講師
2019年～ 兵庫医科大学特別招聘教授（2017～2018年非常勤講師）

主催 日本漢方医学教育振興財団

後援 文部科学省 日本医師会 日本東洋医学会
日本プライマリ・ケア連合学会 日本病院総合診療医学会
日本漢方生薬製剤協会 神奈川県立産業技術総合研究所

協力 日経メディカル開発